平成31年2月23日（土）

第38回「南木倶楽部全国勉強会」（第123回大阪読書研究会）レジュメ　南木隆治

（はじめに）

まさに今年の５月から今上陛下が上皇に、皇太子殿下が新天皇と成られ、「未来」が始まります。我が国のこの転換期と、世界の大転換期が重なっています。そして、我が国はこれから大発展すると私は確信しています。なぜなら、

今年から『天皇の祈り』が倍になります。天皇陛下の祈りと、上皇陛下の祈りです。もったいなく、有り難い事です。今上陛下は、我が国の精神史上、明治維新を越える「時空」をお一人で切り開いてくださいました。「日本国憲法」は『上皇』の出現によって既に、根本的な存立意義の変更が為されました。と言うよりも、本来の我が国（国体）が姿を現し、我が国の本来の姿である「不文憲法」が姿を現したのだと言えます。今上陛下はこのご決断によって、「明治維新」をも超越されました。

天皇制度に関して。行き詰っている諸問題は、『上皇』によって全て解決できます。

Ⅰ　皇統を男系で繋いでゆく事は、政治的に「旧宮家の復活」が政治的にも、国民意識的にも、そう簡単に出来る事ではなく、行き詰っています。しかしこれは、『上皇』陛下が適切な方を旧宮家などから選ばれ、「養子」にされる事で、かなり容易に解決できます。上皇陛下の御眼鏡に適った旧宮家の、皇統につながる男子の方なら、大多数の国民は喜んでこれに同意するでしょう。

（皇室典範に「上皇」の記載はありません。皇室典範第９条の「天皇及び皇族は、養子をすることができない」は「上皇」を縛りません。また、「特例法」の「上皇に関しては、皇位継承資格及び皇室会議の議員資格に関する事項を除き、皇室典範に定める事項については、皇族の例によるものとする」を勘案しても、「養子」は可能です。よって「養子」には皇位継承権はありませんが、いずれ「宮家」に。「旧宮家の〇〇を養子に迎えたい。」と仰せになれば歴史は動きます。）

Ⅱ　現在我が国政府は「ご譲位は一代限り」などと言っているようですが、そういう事にならないと思います。我が国の歴史、思想、哲学、芸術、伝統、神話、そして現下の動きなどを総合的に眺め、分析すれば、今後「上皇の時代」となる可能性もあります。国民が「憲法」によって縛られ、政府も身動きできない情況であるからこそ、今上陛下は「譲位」を決断されたのだと思います。皇太子殿下が新天皇に即位されて以降はどの天皇も「譲位」が出来る情況になりました。

Ⅲ　「上皇」は「天皇」ではないので、「日本国憲法」には規定がありません。また、「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」や、「付帯決議」にも、「上皇」は摂政になれない事や、再度皇位に復帰できないことなど、の規定しかなく、「上皇」の行為を縛る法律は現在ありません。「上皇」は政府からその行為において自由であり、政府も上皇の行為に責任はなく、例えば「靖国神社」に御親拝されても、政府とは関係ありません。上皇の行為に内閣の助言と承認は不要です。

ⅳ　ここが最も重要ですが、「上皇」となられて、何の法的な定めもないからこそ、ますますその「権威」は高まる事になるでしょう。そして、皇太子殿下も立派な天皇になられる事は間違いなく、よって、今年から、天皇の祈りは倍になるのです。

（一部復習）

①　歴史にはシナリオはあるのか。唯物論と、そうでない立場。

Ａ　何故日本文明は特異なのか。縄文、弥生、旧石器時代までさかのぼる特別の事柄。

Ｂ　根本的な哲学について。唯物論と、観念論。何かそのどちらでもない何か。「彼方」「彼岸」の方がはるかに大きく、広大無辺である。

Ｃ　宇宙物理学の現在。宇宙物理学は、いまや非常に「宗教」である。と言うより、
「宗教」は元々「宇宙物理学」だった。

Ｄ　偶然か、必然か。「自然現象と、人間の心」（ユング）

Ｅ　何か「シナリオ」のようなものはあるのか。（アカシックコード）（アカシャー年代記）（ルドルフ・シュタイナー等）

②　朝鮮半島情勢について。「徴用工問題」「レーダー照射」またしても天皇陛下に謝罪を求めるなど、言語道断な状態。半島は北によって統一されるシナリオが進んでいる。韓国軍のクーデターがない限り。

③　核を持ったままの半島国家が成立してこそ、我が国に核武装の機会が回ってくる。

④（復習）歴史認識として、我が国は国家として、対内的にも、対外的にも以下の行事をしなかった。　1995 年に 1885 年「下関講和条戦勝 100 年周年」の記念行事をしなかった。2005 年に 1905 年「ポーツマス講和条戦勝 100 年周年」の記念行事をしなかった。2018 年の昨年「大東亜会議」1943 年の 75 周年記念行事をしなかった。2019 年は、1919 年パリ講和会議・ベルサイユ条約戦勝・国際連盟成立 100 周年である。我が国が世界で最初に「人種差別撤廃条約」の批准を提案した事を取り上げさせる事ができるだろうか。

しかし戦後初めて単独で行動に出た「国際捕鯨委員会」脱退。

⑤　軍事について。「いずも」「かが」の空母化。世界の反応は。

南シナ海で、米中熱戦はありうる。（当然自衛隊は参戦する）、我が国の「（空母）かが」はこの海域で昨年、演習を行い、その後フィリッピンに寄港。潜水艦が同行していた事が明らかになった。チャイナが文句を言うと、小野寺防衛大臣は「15 年前から南シナ海で潜水艦訓練をしている。」と言い、首相が更にそれを繰り返した。このときから景色が変った。（海上自衛隊は「平成 30 年度インド太平洋方面派遣訓練部隊」を編制。「いずも」と同様、最大の空母型護衛艦「かが」、汎用護衛艦「いなづま」「すずつき」の 3 隻と隊員約 800 人が 8 月 26 日から 10 月 30 日まで 2 カ月以上にわたり、インド、インドネシア、シンガポール、スリランカ、フィリピンの 5 カ国を訪問した。）これは我が国単独の演習だった。

⑥ 我が国に順番が回ってくるとはどういうことか。「移民」の問題。ヨーロッパの困難。我が国の実績。復習（あの戦争に勝っていたら・大陸、日本本土の人口構成はどうなったか・そしてこれから）「移民」と、『同化』。「多文化共生」は不可能。

⑦ 「平成」の次の時代、わが国のイメージは国際社会の指導者に変わる。今既に安倍首相は世界一のリーダーの可能性が高いが、これは偶然ではない。きっとわが国に順番が回ってくる。だからその準備を始めよう。世界の大多数の国々で日本は尊敬されている。日本の悪口ばかり言っている特定の国は５年後全てなくなっている可能性の方が高い）あの戦争に勝っていたらどうしたかを考えよう。

⑧（復習・人類の未来）未来から見て、我々はうまく行ったのだ。だから今存在している。

⑨（復習）ホログラム宇宙論。（マンダラと宇宙の設計について。空海の直感の凄さ。両界曼荼羅・胎蔵界曼荼羅・金剛界曼荼羅）。政治思想として、「唯物論」内での「転向」とそうでない「転向」。（再再度、宇宙物理学の現在と、世界像。「情報」の本質について。宇宙は「情報」だけかもしれない。インターネットと、「イデアの世界」。この世界が仮想現実であることを示す証明式 https://www.youtube.com/watch?v=Ftpz8mQiYnQ

⑩　拉致に関する集会と、劇。及び、『フジ住宅』裁判の事。「和解」成立せず、次の裁判は３月以降に再開される。この裁判と我が国の未来は直結していて、東アジア全体の運命とも関わっている。皆様、次の裁判期日が決まったら、ご協力お願いします。

（推薦する書籍　最新）アンダーラインは超重要。Ⅰ「歴史にとって美とは何か」（啓文社）井尻千男　Ⅱ「日本が世界で輝く時代」（育鵬社）田中英道　Ⅲ「2019 年大分断する世界」（ビジネス社）宮崎正弘・渡邉鉄也　①「軍艦『鳥海』航海記」（イカロス出版）平間洋一・平間源之助　②「日本国史」（育鵬社）田中英道　③「元号でたどる日本史」（PHP 出版）グループ SKIT ④「大東亜戦争 失われた真実」（ハート出版）奥本康大

（推薦する書籍。）【最新】①「GAFA vs 中国」（ビジネス社）渡邉鉄也　②「青空の下で読むニーチェ」（勉誠出版）宮崎正弘　③「日経新聞と財務省はアホだらけ」（産経セレクト）高橋洋一・田村秀男　④「軍拡中国に対処する」（勉誠出版）矢野義昭　⑤教科書が教えない楠木正成（産経新聞出版）⑥「日本国紀」（幻冬社）百田尚樹

【最近】①「比較中学歴史教科書」（勉誠出版）伊勢雅臣、②「日弁連の正体」（育鵬社）ケント・ギルバート、③「沖縄戦　集団自決の真相」（アートヴィレッジ）鴨野 守、④「沖縄はいつから日本なのか」（ハート出版）仲村覚、　⑤「靖国の精神史」（ＰＨＰ）小堀桂一郎、⑥「大人の為の儒教教室」（中公新書）加地伸行、⑦「日本人に隠しておけないアメリカの崩壊」（ハート出版）マックス・フォン・シュラー、⑧「日本にリベラリズムは必要ない。リベラルと言う破壊思想」（KK ベストセラーズ）田中英道、⑨「儒教に支配された中国人と韓国人の悲劇」（講談社新書）ケント・ギルバート、⑩「戦後日本教育の不都合な真実」（イースト新書）ケント・ギルバート、⑪「帝国陸海軍から自衛隊そして新国軍へ」（文芸社）高岡昭一　⑫「ようそろ日本丸」（文芸社）中谷悦治　⑬「コミンテルンの謀略と日本の敗戦」（ＰＨＰ）江崎道朗　⑭「反日活動」（青林堂）クリス三宅、⑮米日露協調で韓国消滅・中国没落（海竜社）宮崎正弘・藤井厳喜　⑯「中国に勝つ日本の大戦略」（育鵬社）北野幸伯【南木が繰り返しお勧めする名著】①「隠れていた宇宙」上下（ハヤカワ文庫）ブライアン・グリーン　②「銃・病原菌・鉄」上下（草思社）ジャレド・ダイアモンド③「プレシンギュラリティ」（PHP）齋藤元章　④「スープの手ほどき」（文藝春秋）辰巳芳子　⑤「太平洋に消えた勝機」（光文社）佐藤晃　⑥「ツキの大原則」（現代書林）西田文郎　⑦「通州の悲劇」（自由社ブックレット）皿木喜久　　以上